

# 元首政期ローマ帝国とギリシア知識人

桑山由文

## はじめに

元首政期ローマ帝国においては、当初は首都ローマやイタリアの人々が政治支配層のほとんどを占めていたが、徐々に属州出身者の占める割合が増加していった。ギリシア文化圏である帝国東部の人々にも、こうした社会的上昇は見られた。とりわけ、後一世紀後半のフラウィウス朝からは、政治支配層第一身分である元老院議員身分への進出が拡大していった。続く五賢帝期には、彼らは政権中枢の要職にも登用され、中央政界において確固たる位置を占めるにいたった。そして、三世紀にはついに、東部出身の皇帝すら誕生することとなるのである<sup>(1)</sup>。

時をほぼ同じくして、ローマ帝国東部では様々な知識人が活躍し、ギリシア文化の一大繁栄期を築き上げた。これはしばしば「ギリシア・ルネサンス」といわれ、ブルタルコスやアッリアノス、ルキアノスといった人々が現在でも名高いが、加えて、弁論家たちが大いに活動したこともこの時代の特徴である。彼らは各地で人々に弁論術を教授し、また、練習演説(デクラマティオ)を披露して聴衆を魅惑し、高い社会的名声と多額の報酬を得た。中には、ギリシア都市が皇帝へ

送る請願使節団に加わる者もいた。三世紀のフィロストラトスの『ソフィスト列伝』は、こうした弁論家たちの中でも、ネロ帝期以降のソフィストと呼ばれる人々を古典期ギリシアのソフィストと結び付けた伝記的作品である。そこで、彼の著作にちなんで、この時代の弁論術の隆盛は「第二ソフィスト運動」とも称される。

当時のギリシア文化の隆盛は、単に東部だけでなく、ローマ帝国全体にも広く及んでいた。マルクス・アウレリウス帝(在位 一六一―一八〇年)が、属州ヒスパニア、つまり帝国西部出身であったにもかかわらず、ギリシア哲学に深い関心を示し、ギリシア語で『自省録』を著したことは有名であるが、彼だけではない。二世紀初頭の弁論家ファウォリヌスは属州ガリアのアレラテ(アルル)出身であったし、三世紀頃のギリシア語著作家アエリアヌスは、ギリシア世界の様々な逸話を集めた書物を著したが、イタリアから終生出ることのなかった人物である。

もっとも、この時代のギリシア文芸に関する評価は高くはない。その多くはギリシア古典期のものの模倣にすぎず、内容も空虚で、美文や修辞に堕したとみなされる<sup>(2)</sup>。弁論術も古典期ギリシアと異なって実学としての性格を失い、美しい弁論を行うことそれ自体が目的となっ

窓  
ていたと、古くから批判されてきた。しかしながら、当時のギリシア  
知識人たちの活動が一世を風靡し、ローマ帝国の文化や社会に大きな  
影響を与えたという事実は変わらない。元首政期ローマ帝国の社会を  
理解するうえで、文学的価値判断は抜きにして彼らを考察すること  
が必要なのである。

こうしたギリシア知識人たちの政治的社会的役割については、早く  
は一九六〇年代末に、G. W. Bowersock が第二ソフィストに焦点を  
あてた書物を著し、関心を促した<sup>(3)</sup>。彼によれば、第二ソフィストたち  
は帝国東部における特権的存在であったが、まさにその弁論能力によ  
って騎士身分や元老院議員身分へと社会的上昇を果たしたのである。  
彼の著作はこの分野に関する初の本格的研究であり、現在でも基本的  
にはその価値は失われていない。だが、彼の主張する、ギリシア知識  
人のローマ帝国中央政治支配層への進出傾向については、近年になっ  
て強く批判されるようになってきた。

その先鞭をつけた E. L. Bowie は、ギリシア弁論家たちのほとん  
どが属州上層家系の生まれであったことを指摘し、騎士身分や元老院  
議員身分への社会的上昇はもとも容易であったと、Bowersock に  
反対した<sup>(4)</sup>。すなわち、弁論家たちの社会的上昇は、本人の能力による  
ものではなく、すでに彼らの前の世代や一族から始まっていた<sup>(5)</sup>。弁論  
は、社会的上昇にあたって、いかなる公職に就くかの選択に役立った  
にすぎないという。

ローマ支配下ギリシア人のアイデンティティに焦点をあてた G.  
Woolf や S. Swain <sup>(6)</sup> は、Bowie の考えを継承し、さらに深  
化させていった<sup>(6)</sup>。彼らの研究によれば、ギリシア文化圏の属州上層家

系の人々がみなローマ帝国中央への社会的上昇を欲していたわけでは  
なく、元老院議員身分への進出はごく一部の現象にすぎなかった。当  
時のギリシア人は古典期ギリシアという過去こそを理想化し、ローマ  
帝国の支配の下でも「ギリシア人」としての意識を強く持っていたの  
である。とりわけ、当時のギリシア文化の体現者である知識人層に  
は、ギリシア文化圏こそを世界の中心と考える姿勢がきわめて強く、  
ギリシア世界で高い社会的評価を得ることに熱心であった一方で、  
ローマ帝国の存在は注意深く意識の外に押し出され、ローマ中央政界  
での栄達には関心がなかったとされる<sup>(7)</sup>。その典型として挙げられるの  
が、第二ソフィストの一人ポレモンである。彼は、元老院議員を出す  
家柄の生まれではあったが、自らはローマ帝国政治支配層への上昇に  
関心はなく、ギリシア世界において活躍することにもっとも価値を見  
出していたと考えられている<sup>(8)</sup>。

以上述べてきた、ローマ帝国支配下のギリシア世界に関する最近の  
見解には、納得できる点が多いといわざるをえない。Bowersock が  
主張したような、ギリシア知識人層が単純に社会的上昇を指向したと  
の説にはもはや賛同できないのである。しかしながらその一方で、こ  
れら知識人たちの中でもとくにギリシア至上主義傾向の強い弁論家た  
ちが、ローマ帝国中央で、しかも、騎士身分公職体系の中でも高い位  
置にあった公職に、かなりの割合で登用されていたことも知られて  
いる。すなわち、ギリシア語書簡長官職 *ab epistulis Graecis* であ  
る。ところが先行研究は、この問題に正面から向き合うことはせず、  
むしろ例外的状況として議論を避けているようである。たとえば、  
Bowie は第二ソフィストに限定して議論を行うため、そこに属さな

い弁論家たちは除外されてしまい、彼らも含めた広い視点から、ギリシア語書簡長官職を検討することはしていない。A. R. Birley は、書簡長官 *ab epistulis* やラテン語書簡長官 *ab epistulis Latinis* に関して詳細な検討をしている一方、ギリシア語書簡長官については、フィロストラトスの『ソフィスト列伝』が存在し、史料状況が比較的にため、偶然、ギリシア語書簡長官職を務めた弁論家の情報が多く残っているにすぎないとし、その存在意義を低く見積もる。しかしながら、『ソフィスト列伝』がソフィストや弁論家の登用を伝えるローマ公職の中では、ギリシア語書簡長官職だけが四例と明らかに突出しており、別格的存在なのである。偶然とは考えにくく、この点について何らかの説明が必要であろう。

それでは、彼らギリシア知識人層は、この騎士身分公職へ登用されることをどのように捉えていたのか。その背景には、ローマ帝国東部のいかなる社会状況があったのか。本稿の問題関心はこのような点にある。そこで、まず、第一章にて、ギリシア語書簡長官職の前身と考えられてきた書簡長官職について考察し、次いで第二章にてギリシア語書簡長官職とギリシア知識人との関係を論じていく。

## 第一章 書簡長官職の「分割」

### 第一節 騎士身分公職体系の発展と書簡長官職

まず、書簡長官職が属した騎士身分公職とその階梯について簡単に説明しておく。騎士身分は、初代アウグストゥス帝（在位 前二七―後一四年）の時に、元老院議員身分に次ぐローマ帝国第二支配身分と

して明確に位置づけられた。元老院議員身分と異なり、四〇万セステルティウスの財産資格を満たしていれば容易に加入しえたため、属土上層家系の者が多く参入し、二世紀には帝国全土に約二、三万人は存在したと推定されている。その基本的な役割は、皇帝直屬として、軍団や属州統治などにおいて、第一支配身分の元老院議員身分を補佐するというものであった。

元首政の進展に伴い、騎士身分公職内では徐々に昇進階梯が整備されていった。階梯の低位は軍団副官や歩兵隊長などの軍隊勤務であり、その中から拔擢された者が、プロクラトル（皇帝の代理人）として皇帝属州の財務や小属州統治に登用された。プロクラトル内には俸給によっていくつかの序列があり、それらを経た者の一部は、首都ローマで、書簡長官、請願長官 *a libellis*、会計長官 *a rationibus* などの皇帝官房の長を務め、さらにその中でも、ごくわずかの者が属州エジプト総督、近衛長官 *praefectus praetorio*、穀物供給長官 *praefectus annonae* といった騎士身分最高位の職に就くことができた。

加えて、ハドリアヌス帝期（一一七―一三八年）以降、軍団勤務を経ずに皇帝金庫担当官 *advocatus fisci* などの文官経歴のみを経ての昇進階梯も整備され、プロクラトルのポスト数も大幅に増加した。

また、元老院議員は *clarissimus* という称号を保持していたのであるが、マルクス帝期には騎士身分にも独自の称号が導入され、騎士身分は三段階に区分された。<sup>(12)</sup> 二世紀末から三世紀初頭には、セプティミウス・セウェルス帝（在位 一九三―二一一年）が、元老院議員に代わって騎士身分の者を新設軍団の司令官や新設属州の総督に任じた。騎士身分公職体系は、ハドリアヌス帝期にはほぼ確立し、マルクス帝期に

窓 いったその発展をみせ、セウエルス帝期には元老院議員身分のそれに

匹敵する存在へと成長したといえる。

書簡長官職も、このような騎士身分公職体系の発達に歩調を合わせ  
て変化していった。この職務は、皇帝が出す書簡や布告などの作成に  
携わった。これらの書簡や布告の対象は、属州総督や軍団長といった  
多様な帝国行政・軍事組織、さらには帝国各地の都市だったのであ  
り、膨大な量を扱わねばならなかったと考えられている<sup>(13)</sup>。もっとも、  
書簡長官がどの程度こうした文書の内容に干渉し、軍隊人事や国政運  
営に影響力を行使することができたのかについては議論が分かれると  
ころである<sup>(14)</sup>。

元首政開始当初のユリウス・クラウディウス朝期(一四―六八年)  
には、この職務は皇帝家解放奴隷が担当していたが、ドミティアヌス  
帝期(八一―九六年)後期に騎士身分公職体系に組みこまれた<sup>(15)</sup>。解放  
奴隷アバスカントゥスに代わって、騎士身分のグナエウス・オクタウ  
ィウス・ティティニウス・カピトが書簡長官に任命されたのである<sup>(16)</sup>。  
ドミティアヌス帝暗殺後も、彼は書簡長官としてネルウァ(在位 九  
六一―九八年)、トラヤヌス(在位 九八―一〇七年)と三代の皇帝に  
仕え続けた<sup>(17)</sup>。彼の後任に誰が登用されたかは不明であるが、遅くとも  
ハドリアヌス帝期には書簡長官職への騎士身分登用は確立していた<sup>(18)</sup>。  
そして、その後、二世紀のうちに、ラテン語書簡長官 ab epistulis  
Latinis とギリシア語書簡長官 ab epistulis Graecis の二種に「分  
割」され、以後その状態が恒常化したと考えられている。ところが、  
実は、このラテン語書簡長官とギリシア語書簡長官の「分割」に関し  
ては、いつどのような経緯を経て行われたのか、きわめて不分明な点

が多く、様々な議論がある<sup>(19)</sup>。次にこの点をみていく。

## 第二節 「分割」の研究史

書簡長官職が騎士身分公職となったドミティアヌス帝期以降で、碑  
文史料上初めて確認されるギリシア語書簡長官は、ハドリアヌス帝期  
のウァレリウス・エウダエモである。このことをもって<sup>(20)</sup> O. Hirschfeld  
や H. G. Pfaum など多くの研究者は、ギリシア語書簡長官とラテン  
語書簡長官の分割は、ハドリアヌス帝期であると考えてきた<sup>(21)</sup>。しか  
も、ハドリアヌス帝期には、エウダエモ以外にも、ガイウス・アウイ  
ディウス・ヘリオドルス、カニニウス・ケレルらギリシア文化圏出身  
者で、書簡長官の肩書きを持った人々が見られるので、こうした人々  
も同じくギリシア語書簡長官であったと見なしたのである<sup>(22)</sup>。ハドリア  
ヌス帝が幼少時からギリシア文化に傾倒しており、皇帝になってから  
はアテネの都市景観を大きく変化させるなど、ギリシア文化圏に大き  
く関わっていたことも、この推論の背景にはあったのであろう。

これに対して、G. B. Townend は、書簡長官就任者の出身地から  
ラテン語とギリシア語書簡への職務分掌を類推するのではなく、当該  
人物の経歴を記した碑文や文献史料中の表記に忠実に従うべきと考え  
た<sup>(23)</sup>。すなわち、ラテン語書簡長官が初めて史料的に確認できる、マル  
クス・アウレリウス帝期の一六六年頃こそが分割の時期なのであり、  
最初のギリシア語書簡長官はティトゥス・クラウディウス・ウィビア  
ヌス・テルトゥッルスであったとする<sup>(24)</sup>。Townend の考えるところでは、  
エウダエモがギリシア語書簡長官であったのは例外的事例にすぎ  
ない。また、書簡長官として史料に肩書きが現れるアウイディウス・

ヘリオドルスやカニニウス・ケレルは、ギリシア語書簡長官ではなく、ラテン語とギリシア語をとにも担当していたということになる。

Bowie や Birley は、この Towmend の指摘を基本的には受け入れ、マルクス帝期前半を分割の時期とした。たとえば、前述のカニニウス・ケレルの場合、出身地がギリシア本土とはいえローマ植民市コリントスと目されていることから、Birley は、彼がギリシア語、ラテン語双方に精通していたのだろうと考えるのである。<sup>(25)</sup>ところが、Towmend の立場に対しては、反論も根強い。R. Syme や Pflaum などは、Towmend の論考発表後も、ハドリアヌス帝期を分割時期とする<sup>(26)</sup>。実は、Birley も、ラテン語書簡長官とギリシア語書簡長官の上位に別の書簡長官がいた可能性はありとしており、また、ギリシア世界出身者にラテン語文書を充分に担当する能力があったのか疑問の場合もあると、全面的に賛成ではない。<sup>(27)</sup>

現在ではプロンポグラフィ研究の進展の結果、Towmend の頃に比べて、書簡長官職就任者に関する情報量は増加している。<sup>(28)</sup>とはいえ、結局のところ、書簡長官職全体に関する史料状況にはかなりの問題があるといわざるをえない。文献史料が書簡長官として言及するだけで、経歴を記した碑文史料が存在しない人物も多い。ある皇帝の時期に何人の書簡長官がおり、どのような順に登用され、どれくらいの在職期間であったのかすらはつきりしないのである。

Towmend 説は、数少ない碑文史料に頼りすぎ、また、史料を残した人々が、正確に肩書きを記していることを前提としすぎている。表記の問題は確かに重要ではあるが、碑文史料ならばともかく、ディオ・カッシウスやフィロストラトスなどのギリシア語著作家による文

献にまで表記の厳密さを前提とするのは問題があらう。もともとギリシア語著作における、ローマ帝国行政職に関する表記は、ラテン語著作ほどに厳密でないことが多く、「ギリシア語書簡長官」という肩書きに言及する場合に、「ギリシア語」を書き落としてしまっても不思議はない。たとえば、フィロストラトスの表記に従えば、テュルスのハドリアヌスの職務は単に「書簡長官」としか記されていないが、彼は明らかにギリシア語書簡長官であった。<sup>(29)</sup>また、前述のカニニウス・ケレルも、ディオの記述では単に「書簡長官」である一方、『ローマ皇帝群像 (Historia Augusta)』『哲学者マルクス・アントニヌス』第二章四節ではギリシア語修辭学教師として言及されており、ギリシア語書簡長官とみるべきであらう。したがって、肩書の表記だけでなく、出身地など様々な要素を勘案し、文脈に応じて検討する Pflaum の理解の方が説得力がある。ウァレリウス・エウダエモ以降、アウィディウス・ヘリオドルス、カニニウス・ケレルの二人もギリシア語書簡長官であったと考えるべきであらう。

しかし、このことは、エウダエモの時に書簡長官職がラテン語とギリシア語担当に分割されたことを意味するのではない。Pflaum も含めて、先行研究には共通して大きな問題がある。碑文にギリシア語書簡長官、もしくはラテン語書簡長官の表記が初出する時点をもって、その時に分割されたと考える点である。次に節を改めて、この点について詳しく検討する。

### 第三節 ギリシア語書簡長官職の特殊性

そもそも、書簡長官職という一つの職務が、ギリシア語とラテン語

窓の二つに「分割」された、と考える必要があるのか。この「分割」と

いう概念は碑文史料からの類推にすぎない。実際に分割の事実を記す文献史料は存在しないのである。むしろ、書簡長官職に付属する形

で、早くからギリシア語書簡長官職だけが存在し、後にマルクス帝期になって、書簡長官職の方がラテン語書簡長官職という名称に変化したか、もしくは、書簡長官職の方の職務内容に大幅な変更があったのかもしれないと考える方が納得がいくのではないか。以下に根拠を三点挙げる。

第一に、ギリシア語書簡を担当する職務それ自体は、ハドリアヌス帝期の騎士身分公職化の前に既に存在し、ギリシア知識人が登用されていた。職務名称は微妙に異なるが、クラウディウス帝期(四一―五四年)のティベリウス・クラウディウス・バルビッルスがそれである<sup>(30)</sup>。しかも、彼より後も、クラウディウス、ネロ帝期(五四―六八年)にガイウス・ステルティニウス・クセノフォン、アレクサンドリアのディオニシウスの二人が同様の職務に就いていたようである<sup>(31)</sup>。彼らは、当時大変著名なギリシア知識人であった。しかも、重要なことに、彼らはいずれも解放奴隷ではなく、騎士身分である。つまり、書簡長官職の騎士身分公職化に先駆けて、ギリシア語書簡長官には、解放奴隷ではなく、それなりの身分の人々が登用されていたということになる。すなわち、ギリシア語書簡長官のみに着目した場合、ユリウス・クラウディウス朝期と二世紀との間に、ある程度の連続性が確認できるのである。

根拠の第二は、騎士身分公職階梯におけるギリシア語書簡長官職の位置である。ギリシア語書簡長官職は、騎士身分公職階梯の中で、ラ

テン語書簡長官職より低く位置づけられていた。たとえば、マルクス帝期の「――イリウス(名の前半欠損)」なる人物は、ギリシア語書簡長官職の後に属州プロクラトル職に登用され、その後で、ラテン語書簡長官となっており、明らかにギリシア語書簡長官職はラテン語のその下位であるばかりか、一部の属州プロクラトル職より下ですらあったのである<sup>(32)</sup>。これは、前述のウァレリウス・エウダエモの経歴からも分かる<sup>(34)</sup>。彼はギリシア語書簡長官職の後、小アジア諸地方(リュキア・パンフュリア、ガラティア、パフラゴニア、ピシディア、ポントゥス)を一括して扱うプロクラトル職、さらに、属州アジアや属州シリヤのプロクラトル職を経験している。つまり、ギリシア語書簡長官職よりもこれら重要属州のプロクラトル職の方が上位に置かれているのである。しかも、騎士身分公職の筆頭である近衛長官職に、ギリシア語書簡長官職経験者は一人として到達していない。

一方、ラテン語書簡長官就任者についての史料は少ないものの、知られている限りでは、その後の経歴には属州プロクラトル職はなく、騎士身分最高公職であるエジプト総督職や近衛長官職に登用されるか、元老院議員身分へ特別編入 *adlectio* されているのみである<sup>(35)</sup>。ラテン語書簡長官職は、騎士身分階梯の中で、これら最高職に次ぐ位置にあったことが分かる。

根拠の第三は、ラテン語、ギリシア語書簡長官の具体的な職掌である。本章第一節末で述べたように、これに触れる史料が大変少ないため、状況証拠に依存するほかないのであるが、A. R. Birley の議論が示唆的である<sup>(36)</sup>。彼は、E. Birley の議論をひきつつ、騎士身分の初代書簡長官ティティニウス・カピト、マルクス帝期のラテン語書簡長官

タルッティエヌス・パテルヌスらを分析し、彼らが軍事やそれに関する法について専門知識を有していたと論じ、様々な軍事ポストの配分などへも影響力を行使したとする。要は、この職には軍事的性格が強かったのだと考えるのである。<sup>(37)</sup>ところが、注目すべきことに、彼の議論で対象となっている者の中にギリシア語書簡長官は全くいない。つまり、彼の議論は、結果的に、書簡長官とラテン語書簡長官との性格の類似、ギリシア語書簡長官の異質性を指摘していることになるのである。

同様の異質性は、近衛長官職との関係からも指摘できる。書簡長官やラテン語書簡長官には、近衛長官と密接な関係を構築し、ともども失脚した事例がある。たとえば、ハドリアヌス帝の書簡長官であったガイウス・スエトニウス・トランクィッルスは、近衛長官セプティキウス・クラルスとともに、皇后サビナとの限度を越えた「交流」のために失脚した。<sup>(38)</sup>一方、ギリシア語書簡長官にはそうした近衛長官との新しい関係は知られていない。皇帝側近集団中のギリシア語書簡長官職の位置づけは、ラテン語のそれとはかなり異なっていたのである。

実際、帝国行政、特に軍事面においては、帝国全体の公用語であるラテン語が占める割合が大きかった。一方、ギリシア語書簡長官の職掌範囲は、当然のことながら、ほぼギリシア文化圏に限定されざるをえず、担当内容も基本的には非軍事的なものであったと思われる。ただし、本稿冒頭で述べたように、一世紀後半から二世紀にかけて、帝国中央と東部とのかわりはきわめて緊密になってきていた。ギリシア語書簡長官の地位は低くとも、業務量は着実に増加していたであろう。そこで、書簡長官の方を「ラテン語」書簡長官と強調する必要が

でてきたのではないか。つまり、分割が行われたのではなく、両職の差異を明確にすることが必要だったのである。

以上の議論から、騎士身分公職体系内における、ギリシア語書簡長官職の位置は、きわめて独特のものであったことが明らかになった。ギリシア語書簡長官職は、ユリウス・クラウディウス朝以来、書簡長官職に付属する形で、ギリシア文化圏に関する文書を扱う非軍事的性格の公職として存在したのであり、マルクス帝期になって、ギリシア語書簡長官職の業務が拡大したため、書簡長官職がラテン語書簡長官職へと名称を変更して区別されたと考えるのが妥当である。すなわち、ギリシア語書簡長官職は、騎士身分の典型的な昇進の流れからは外れていた公職であった。先行研究は、ギリシア語、ラテン語を問わず、書簡長官職をすべて同じ性格、同じランクの騎士身分公職として論じたため、こうしたギリシア語書簡長官職の特殊性を見落としていたのである。

このように、騎士身分公職階梯では異色であったとはいえ、ギリシア語書簡長官職がユリウス・クラウディウス朝期からの長い歴史を有していたことは、ローマ帝国行政に、ギリシア文化圏との意思疎通を図るための職を専門的に置き続ける必要性があったことの証左でもある。騎士身分公職階梯を上がってきた人間なら誰でも良いというわけにはいかなかった。ギリシア文化を熟知している人間でなければ職務を果たしえなかったのである。そして、こうした特殊性こそが、ギリシア知識人に、この職務を熱望させることになる。

## 第二章 ギリシア知識人とギリシア語書簡長官職

## 第一節 ギリシア語書簡長官職をめぐる確執

ギリシア知識人層がギリシア語書簡長官職に対してどのような姿勢を示していたのかを示唆するのが、歴史家ディオ・カッシウスが伝える、ミレトスのディオニュシウスの発言である。彼は、フィロストラトスの『ソフィスト列伝』に第二ソフィストの一人として描かれている人物で、ハドリアヌス帝の時代に弁論家として活躍した。生地はミレトスであるが、弁論家活動の中心はエフェソスに置いたらしい。ディオ・カッシウスの記述（六九卷三章五節）によれば、ディオニュシウスは、ハドリアヌス帝のギリシア語書簡長官に任じられていたガイウス・アウイディウス・ヘリオドルスと険悪であり、「皇帝は確かに君に金 *χρῆμα* と名譽 *τιμή* を与えることはできるが、君を弁論家にすることはできない」と彼を非難した。<sup>(39)</sup>

非難されたアウイディウス・ヘリオドルスについては、第一章でも簡単に言及したが、シリアのキュッルス出身で、ギリシア語書簡長官の後にはエジプト総督となったことが分かっている。<sup>(40)</sup> 一般に、彼は、この二つの騎士身分公職に登用されたことをもって、典型的騎士身分の公職階梯を登り詰めてきた、とみなされる傾向にある。しかし、彼のエジプト総督就任については、ディオが、別の箇所で、「ヘリオドルスは弁論術に長じているがゆえに総督職を手に入れた」と述べており、<sup>(41)</sup> 順当な昇進というよりは、異例の任命であったことが窺える。むしろ、ヘリオドルスは、ギリシア語弁論術に堪能であったこと、ま

た、ディオがディオニュシウスの敵対者として描いていること、第二ソフィストの一人であるアエリウス・アリスティデスと親交があったことなどから考えると、本来はディオニュシウスと同じような立場のギリシア文化圏の知識人であった。<sup>(42)</sup> したがって、先に引用したディオ・カッシウスの記述（六九卷三章五節）は、ギリシア語書簡長官職をめぐる、ギリシア知識人同士の激しい競争意識を表しているのである。ディオニュシウスは、自分ではなく、日頃から弁論術の競争相手であったヘリオドルスがギリシア語書簡長官に登用されたことへの不満を表明していると考えてよい。<sup>(43)</sup>

さらに、前章において触れたカニニウス・ケレルは、ヘリオドルスの後にギリシア語書簡長官となったが、このディオニュシウスとは弁論術を学んでいた青年期から、ずっと不倶戴天の敵同士であった。<sup>(44)</sup> フィロストラトスはケレルの作品が人々によって誤ってディオニュシウス作とされていることを嘆き、ケレルは弁論家よりもむしろ文筆家として優れていたとして、ディオニュシウスよりも劣った存在であることを強調している。フィロストラトスの叙述がディオニュシウス賛美を目的としていることを考慮すると、ケレルは、ディオニュシウスとは得意分野が異なったのかもしれないが、ともかくも、当時の人々がディオニュシウスと作品を混同してしまうほど、彼と比べても遜色ない高い評価を得ていたのであろう。すなわち、彼らは、平常、ギリシア知識人として競い合う関係にあり、ギリシア語書簡長官職の争奪もその延長線上にあったのである。ヘリオドルスの場合と同じ競争意識がここにも見られる。

しかも、興味深いことに、ディオニュシウスは、フィロストラトス



によれば、ハドリアヌス帝によって、名前は不明ではあるものの、格の高い属州のプロクラトルに任命された。<sup>(45)</sup> 前章で議論したように、ギリシア語書簡長官職は重要属州のプロクラトル職よりも低い位置にあった。つまり、公職階梯の中ではほぼ同等、もしくはそれ以上の職に就いていた可能性があるにもかかわらず、ディオニシウスにとって、ヘリオドルスを嫉ましく思うほど、ギリシア語書簡長官職の方が、価値のある公職であったことになるのである。

では、彼らは何を目的として、それほどまでにギリシア語書簡長官職を求めたのか。その職の何が彼らを魅了したのか。ディオが伝える、前述のミレトスのディオニシウスの発言は、まさにその点を明らかにしている。「金と名誉」なのである。「金」とは、当然、この職就任者の俸給を指すのであろう。<sup>(46)</sup> それでは「名誉」*κτιμή*とはどのようなものだったのか。

それを如実に示すのが、テュルスのハドリアヌスの例である。彼はフィロストラトスのいう第二ソフィストの一人で、マルクス帝期からコンモドゥス帝期にかけて活躍した人物であった。その師は、高名なソフィストかつ元老院議員のヘロデス・アッティクスである。<sup>(47)</sup> ハドリアヌスは、彼の下で修業を積んだ後、アテネおよびローマのギリシア弁論術欽定講座の教授になった。<sup>(48)</sup> フィロストラトスが伝えるところでは、彼がギリシア語書簡長官に任命されるにあたっての状況は次のようなものであった。<sup>(49)</sup>

「彼（テュルスのハドリアヌス）がローマで病に倒れ、臨終の床にあったとき、コンモドゥス帝は彼を（ギリシア語）書簡長官に

任命する決定を下し、あわせて、もっと早くにそうしなかったことを弁明した。すると、（テュルスの）ハドリアヌスは、いつものようにムーサの女神たちを呼び入れてから、皇帝の勅裁書に恭しく拝礼し、これを目の前にしたまま、この名誉<sup>κτιμή</sup>を自分の死装束にして息を引き取った。」（傍線筆者）

コンモドゥス帝は、死の床にいる彼をわざわざギリシア語書簡長官に任命し、ハドリアヌスは喜んで受けたのであった。死の直前の任命では、明らかに実質的な職務担当はできない。だが、それにもかかわらずこの職務に任命されたという事実は、この職への任命そのものが、一種の勲章のような大きな意味を持っていたことを示している。とくに注目すべきは、先のディオの記述と同様、名誉<sup>κτιμή</sup>という言葉が用いられている点である。また、同じ第二ソフィストの一人であるセレウキアのアレクサンデルも、死の間際ではないが、晩年にギリシア語書簡長官に任命された。<sup>(50)</sup> この職務への任命は、ギリシア知識人としての経歴の最後を飾るにふさわしいものであった。

これと符合するのが、アウイディウス・ヘリオドルスの経歴に関するディオ・カッシウスの感想である。ディオは、「彼（ヘリオドルス）はエジプト総督となって満足してしまった」と、ギリシア人弁論家にふさわしい仕事ではないとのニュアンスをこめて、エジプト総督について非難している。その一方で、ギリシア語書簡長官就任について、彼は何も批判していないのである。<sup>(51)</sup>

以上より、ギリシア知識人の中には、騎士身分公職階梯の中でギリシア語書簡長官職こそが、自分たちにもっともふさわしいものである

窓 という強い意識があり、この公職に到達することを大いに希求していたといえる。これこそが、彼らにとって最大の「名誉」なのであ

た。それでは、なぜこの公職がそうした性格を有することになったのか。「名誉」の内実とはいかなるものであったのか。この背景には、

ギリシア世界におけるローマ皇帝の位置づけがあった。次にその点を考察する。

## 第二節 ギリシア知識人とローマ皇帝

ギリシア世界において、ローマ皇帝はどのように認識されていたのか。当時のギリシア世界ではローマ帝国の存在を故意に無視する傾向があったとはいえ、ローマ皇帝だけは別格であった。ヘレニズム時代以来からの君主崇拜の流れを汲んで、皇帝崇拜が東部では早くから盛んであり、また、都市内部の争いや、都市間の争いを解決してくれる、ギリシア世界より一段高次の存在として、皇帝への依存度は時代を経るに従って強くなっていった。<sup>(52)</sup>

とりわけ、ハドリアヌス帝期後半にはパンヘレニオン都市同盟、すなわち「全ギリシア」という名称を持つ都市同盟が帝の肝いりで新たにつくられ、ギリシア文化圏の都市が多く加盟することとなった。<sup>(53)</sup>この同盟の加入条件のひとつは、皇帝がその都市にいかにも恩恵を施しているか、というものであったと考えられており、ギリシア世界はますますローマ帝国ではなく、皇帝を強く身近に感じようようになっていった。<sup>(54)</sup>

ギリシア語書簡長官は、いわばこの皇帝とギリシア世界の諸都市との仲介役であった。前述のように、ギリシア語書簡長官の主たる職務

の一つは、皇帝からギリシア都市へ宛てた書簡の作成であった。しかも、対象とするのは一都市にとどまらず、ギリシア世界全体の諸都市であるわけで、いわば「全ギリシア」的性格を有していたともいえる。つまり、ギリシア語書簡長官職は、ローマ帝国中央の騎士身分公職とはいえ、その性格はほぼギリシア世界とだけ密接にかかわるものであり、そこへの登用はギリシア世界からの遊離を意味しはしなかったのである。

第二に、ギリシア諸都市からの請願に対して、皇帝は遠征中ですら対応していたようであり、ギリシア語書簡長官は、常に皇帝に随行する必要があった。<sup>(55)</sup>このことは、彼らと皇帝および皇帝家との私的な結びつきも大いに強めることになった。たとえば、前述のカニニウス・ケレルが、ハドリアヌス帝の臨終を看取るほど親密な関係にあったことを、マルクス帝は『自省録』で述べている。<sup>(56)</sup>こうした結びつきは、ギリシア知識人にとって、より大きな意味を持った。というのも、ギリシア語書簡長官となることは、しばしば、皇帝家のギリシア語や弁論術の教師たることをも意味したのである。ギリシア語書簡長官職に登用されたギリシア知識人の中で、カニニウス・ケレルはマルクス帝の、ティトゥス・アイウス・サンクトゥスはコンモドゥス帝の、アエリウス・アンティパテルはカラカラ帝とゲタ帝の、少年時代におけるギリシア弁論術の教師であった。<sup>(57)</sup>

第二ソフィストたちの多くはアテネとローマに置かれていた弁論術の欽定講座の教授職を務めており、フィロストラトスはしばしば、その地位を巡る争いについて伝えている。<sup>(58)</sup>皇帝の師となること、それらの教授職就任をはるかに超越した価値をその人物に付与したこと

は、想像に難くない。実際、アンティパテルは、エフェソスに刻まれた碑文に、皇帝の師かつギリシア語書簡長官として名前が挙がっているのである。<sup>(59)</sup>

なお、サンクトゥスは、プロクラトル職、会計長官、エジプト総督を経て、元老院議員身分に特別編入された。Bowie は、彼の順調な出世は、すべてコンモドゥスの教師となったためであるとし、ギリシア語書簡長官就任の意味は低く見積もる。<sup>(60)</sup> だが、Painin によれば、サンクトゥスは、ギリシア語書簡長官を最初の公職として務め、その後で他の騎士身分公職とともにコンモドゥスの教師となった可能性が高い。<sup>(61)</sup> 彼が教師となる直接の要因は、ギリシア語書簡長官職へ登用されたことであり、その意義を軽視すべきではない。また、他の公職や元老院議員編入については、サンクトゥスにとってより価値があったのは、次期皇帝の教師となる方であり、社会的上昇は自らが求めたというよりも、師となったことに付随する結果にすぎなかったのである。実際、彼と同様にケレルとアンティパテルも、ギリシア語書簡長官職が、その経歴の中で、既知の最初のローマ公職であった。明らかにこの職への登用こそが、皇帝家子弟のギリシア文化教育を任されることと密接に結びついたのである。

以上のように、ギリシア語書簡長官職への就任は、ギリシア世界最大の知識人であることを証すると同時に、ローマ帝国のまさに中核においてギリシア文化の誇りを示すことをも意味したのである。ギリシア知識人、とりわけ当時「花形スター」であった弁論家にとっては、面目躍如であった。彼らは、自分たちがギリシア文化人である誇りを捨ててローマ帝国に阿っているとは決して考えていなかったのである。

## おわりに

ギリシア語書簡長官職は、書簡長官職やラテン語書簡長官職とは異なる性格を有し、ローマ帝国の騎士身分公職階梯の中ではそれなりの序列にあったとはいえ、きわめて特殊な位置にあった。まさにギリシア語に特化した専門職だったのであり、騎士身分上層の人々一般が栄達のために狙うような公職ではなかった。

しかし、むしろ、その専門的性格および皇帝との近しさゆえに、ギリシア知識人にとって、この公職に登用されることは、当時のギリシア文化圏の中で最高の社会的評価を得ることを意味し、最大の名誉であった。彼らにとって、このギリシア語書簡長官職の、騎士身分公職階梯の中の位置に意味はほとんどなかった。この職自体が有していた、ローマ帝国行政や騎士身分公職階梯を逸脱した独自の「ギリシア的」価値こそが重要だったのである。それゆえに、この職務は、ギリシア文化の代表であるとの意識が強いソフィストたちにとっては、経歴の最後を飾るにふさわしく、また、この公職をめぐる確執には激しいものがあつたのである。

本稿における以上の議論は、近年のローマ元首政期ギリシア文化に関する研究動向と考え合わせると、大きな意味を持つてくる。「はじめに」で触れたように、ギリシア知識人たちはギリシア世界において高い社会的評価を受け、報酬を得ることに大いに関心があつたが、騎士身分や元老院議員身分としてローマ中央へ社会的上昇をすることにはあまり関心がなかったと考えられている。たとえばテュルスのハドリアヌスはまさにそうした人々の典型であった。首都ローマでの彼

窓の弁論が、ギリシア文化に関心のある人だけでなく、ラテン語を習っている人を含めてあらゆる人々をギリシア弁論へと引きつけたとフィロストラトスは記している<sup>(62)</sup>。その意味で、彼はまさにギリシア文化の体現者であり、ローマ的観念とは縁のない人物だったのである。そうした人物ですら歓迎したものがギリシア語書簡長官職であった。

彼らギリシア知識人層は、ギリシアの価値観を強く有していたからこそ、ローマ帝国のギリシア語書簡長官になることを望んだのである。ギリシア世界の中で得られる社会的評価には当然限界があった。そうした彼らにとってこの公職は、ローマ帝国行政機構に所属しながらも、ギリシア文化人としての誇りを損なうことなく、むしろ前面に押し出すことのできる、稀有な公職であった。一方、ローマ帝国にとっては、東部行政の円滑化が期待できた。ギリシア文芸の専門家を求めるローマ帝国の「利害」と、ギリシア世界最高の評価を求める弁論家の「利害」とがまさしく一致していたのであり、こうしてローマ帝国とギリシア世界は、微妙なつながりを維持していったのである。

それでは、この関係は、三世半ばの軍人皇帝時代以降、帝国が内外に不安定要因を抱えるようになり、それに伴って新たな騎士身分階層が台頭してくると、どのような変遷を遂げるようになるのか。今後の課題としたい。

### 註

- (1) 桑山由文「ローマ帝国東部の発展と王家の記憶—フラウィウス朝から五賢帝期へ—」『西洋史研究』新輯三〇(二〇〇一年)「四—一六三頁」。
- (2) たとえば、高津春繁、斎藤忍随『ギリシア・ローマ文学案内』(岩波書店、一九六三年)、八八頁。

(3) G. W. Bowersock, *Greek Sophists in the Roman Empire*, Oxford, 1969.

(4) E. L. Bowie, 'The Importance of Sophists', *YCS* 27, 1982, 29-59.

(5) Bowie, op. cit., 47.

(6) G. Woolf, 'Becoming Roman, Staying Greek: Culture, Identity and the Civilizing Process in the Roman East', *PCPhS* 40, 1994, 116-143; S. Swain, *Hellenism and Empire*, Oxford, 1996.

(7) Գալսյէր G. Salmeri, 'Dio, Rome, and the Civic Life of Asia Minor', *Dio Chrysostom*, ed. by S. Swain, Oxford, 2000, 59.

(8) Salmeri, op. cit., 59.

(9) A. R. Birley, *Locus virtutibus patefactus? Zum Beförderungssystem in der hohen Kaiserzeit*, 1992.

(10) 政治支配階層における騎士身分の位置とその史の変遷については、南川高志「ローマ皇帝政治の進展と貴族社会」『岩波講座世界歴史四 地中海世界と古典文明』(岩波書店、一九九八年)、三二一—三四二頁。新保良明「ローマ帝政前期における騎士官僚—任官と任務に関する一考察—」『歴史』一〇五(二〇〇五年)、一一—一九頁。

(11) *HA, Hadrianus*, 20. ハドリアヌス帝は「皇帝金庫長官の職を初めて制度的に定めた」のであった。以下、訳出にあたっては、南川高志訳『ローマ皇帝群像 一』(京都大学学術出版会、二〇〇四年)に拠り、用語等は本稿に合わせて改変した。

(12) もっとも、近衛長官のうち、一部は在職中にコンスル格頭章 *ornamenta consularia* を受けること<sup>(13)</sup>、騎士身分でありながら *vir clarissimus* となっていた。桑山由文「元首政期ローマ帝国における近衛長官職の確立」『史林』七九—二(一九九六年)、二七—三三頁。

(13) フラウィウス朝期の詩人スタティウスの『シルヴァエ』*Silvae* 第五巻が、書簡長官であった皇帝家解放奴隷アスカントゥスに宛てられたものであり、書簡長官の業務内容に触れていると考えられている。

(14) A. R. Birley, *Locus virtutibus*, 23-27 et 41-54; 新保良明「ローマ帝政前期の騎士将校に関する一考察—任務と任官を巡って—」『青史学』二三(二〇〇五年)、一九六—二〇〇頁。

- (15) 書簡長官だけでなく、請願長官、会計長官といった皇帝官房組織 (officia Palatina) の長も解放奴隷であった。なお、六九年の「四皇帝の年」にも、オト帝が書簡長官職に騎士身分のユリウス・セツンドゥスを、ウィテリウス帝が請願長官職に騎士身分のセクストゥス・カエシウス・プロポルテウスを登用したことが分かっているが、続クウェントゥシヌス帝はこれらの職務を従来と異なり解放奴隷の手に戻したところへ、恒常的措置とはならなかった。ILS 1447; Tac. Hist., 1, 58, 1; Plut., Otho, 9.
- (16) キュムドゥは、H. G. Pfauum, *Les carrières procuratoriennes equestres sous le haut-empire romain*, Paris, 1960-1, (以後 CP に略す) no. 60 や新保「騎士将校」一九六一一九八頁。カビトは典型的騎士身分公職階梯を経て、この職務に就いた。小プリニウス『書簡集』Epistulae では彼との間の書簡が数編残されており、そこから、彼が文学的教養に富んだ人物であったことが分かる。
- (17) ドミティアヌス帝暗殺で経歴が中断しなかったことから、帝の暗殺に大差へかかわっていたのではなからと推測されている。
- (18) HA, Hadrianus, 22. クエリヌス帝は「書簡長官と請願長官の職に、初めて騎士身分の者を登用した人であった」。
- (19) 以下、本文の記述で「書簡長官」と記す場合は、ギリシア語「ラテン語」の区別がなく ab epistulis を指す。
- (20) ILS 1449, 彼の経歴の註記については、Pfauum, CP, no. 110.
- (21) O. Hirschfeld, *Die kaiserlichen Verwaltungsbeamten bis auf Diokletian*, 2nd ed., Berlin, 1905, 321-325; Pfauum, CP, 60-61.
- (22) フウチヤウス・クリオネヌスについては、Pfauum, CP, no. 106 参照。カトリウス・ケレンスについては、Pfauum, CP, 1021.
- (23) G. B. Townend, 'The Post of Ab Epistulis in the Second Century', *Historia* 10, 1961, 375-381.
- (24) ティトマス・クラウヂヤウス・ウヰユブヌス・テルトウマルヌス (ILS 1344; Pfauum, CP, no. 252)° 及び Townend の著する最初のラテン語書簡長官が、ガイウス・カヌア・マニアン・クヌル・トマヌス (ILS 1453; Pfauum, CP, no. 166) である。
- (25) A. R. Birley, *Locus virtutis*, 48.
- (26) R. Syme, 'Avidius Cassius: His Rank, Age, and Quality', *RP*, 5, 1988, 696-697; H. G. Pfauum, 'La valeur de la source inspiratrice de la Vita Hadriani et de la Vita Marci Antonini a la lumière des personnalités contemporaines nommément citées', *BHAC* 1968/1969, 197-198.
- (27) A. R. Birley, *Locus virtutibus*, 48-49; Id., *Hadrian: The Restless Emperor*, London & New York, 1997, 355.
- (28) Bowie, op. cit., 57-59 がギリシア語書簡長官については、A. R. Birley, *Locus virtutibus*, 48-53 が書簡長官「ギリシア語」ラテン語書簡長官の全体については詳しくギリシア語を提示している。
- (29) Philostratus, VS, 590. 彼の経歴については本文二七頁参照。
- (30) *Forsch. Ephes*, III, no. 42; Pfauum, CP, no. 15. マニョヌスの職名は ad legationes et responsa Graeca である。なお、ローマ中央政界における「ギリシア知識人としてのマルティヤヌスの役割については、桑山由文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア本土の変容——東部出身元老院議員の台頭と「アテナイ」——筑谷和比古編『公家と武家——四』(思文閣出版、二〇〇八年発行予定)。
- (31) シェンケンヌスについては Pfauum, CP, no. 16 参照。キョネリトマヌスについては、PIR<sup>2</sup>, III, 103 参照。
- (32) W. Eck, 'The Growth of Administrative Posts', *CAH* XI, 2000, 249; A. R. Birley, *Locus virtutibus*, 21.
- (33) ILS 1452; Pfauum, CP, no. 178.
- (34) 本稿註(28)°。
- (35) 書簡長官のセクストゥス・コルネリウス・レベントィヌス「ラテン語書簡長官のタルマッティヤヌス・マニヌス (Pfauum, CP, no. 172) が近衛長官職に到達した。前者の近衛長官職就任は近年新たな碑文から判明した。E. Birley, 'A note on Cornelius Repentinus', *BHAC* 1982/83, 69-72; AE, 1980, 235.
- (36) A. R. Birley, *Locus virtutibus*, 47.
- (37) については、新保「騎士将校」一九六一一九八頁は Birley の見解を

反対し、書簡長官職の人事介入権がそれほど強くはなかったことを説得的に論じている。

- (38) *HA, Hadrianus*, 11, 3.  
 (39) *Dio Cassius*, 69, 3, 5.  
 (40) *Phaum, CP*, no. 106.  
 (41) *Dio Cassius*, 71, 22, 2.  
 (42) *HA, Hadrianus*, 16, 10 は、ストア派のヘリクラテスについて、哲学者としてクリオナルスなる人物を挙げる。だが、このクリオナルスがマウロ・ティウス・クリオナルスと同一人物であるかは議論がある。Phaum, *CP*, 253.  
 (43) F. Millar, *The Emperor in the Roman World*, New York, 1977, 88.  
 (44) *Philostratus, VS*, 524.  
 (45) *Philostratus, VS*, 524. なぞ、彼が、何らかの属州のプロソラトルに任命されたことは碑文からも判明している。C. P. Jones, 'Prosopographical Notes on the Second Sophistic', *Greek, Roman, and Byzantine Studies* 21, 1980, 373-74.  
 (46) Phaum にあれば、この職務の俸給は二〇万セステルティウスであった。  
 (47) *Philostratus, VS*, 585-586.  
 (48) *Philostratus, VS*, 586-587.  
 (49) *Philostratus, VS*, 590. 訳文は、戸塚七郎、金子佳司訳、『プロソラトス・ヘウナレオス』『哲学者・ソフィスト列伝』(京都大学学術出版会、二〇〇一年)により、一部訳者が補った。  
 (50) *Philostratus, VS*, 576.  
 (51) *Dio Cassius*, 71, 22, 2.  
 (52) 南川高志「ローマ帝国とギリシア文化」、藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』(南窓社、一九九三年)、九四—一〇〇頁。  
 (53) もっとも、実際に加入したことが判明している都市は、ギリシア本土の都市を中心として、エーゲ海周縁の諸都市であった。ヘルガモンやヘフェッス、アンティオキアといった大都市の加盟は知られていない。こ

の同盟に関しては、碑文史料からの断片的情報が主であり、詳細については議論がある。以下に拙稿参照のよう。T. Kuwayama, 'Greek Elites during the Roman Empire: The Sense of Identity of the Senators from the Greek East', *KODAI*, 13/14, 2003/04, 154.  
 (45) M. T. Boatwright, *Hadrian and the Cities of the Roman Empire*, Princeton, 2000.

- (45) *Philostratus, VS*, 571.  
 (46) *M. Aur., Med.*, 8, 25.  
 (47) ティウス・マイウス・サンシトマス (Phaum, *CP*, no. 178bis) / マトリウス・インテレンテス (Phaum, *CP*, no. 230)。  
 (48) 初めて欽定講座を設けたのはウァレントゥス帝のローディオン弁論とギリシム弁論の二つを設けた (Suetonius, *Vespasianus*, 18, 1)。  
 その後、ユリアス帝が帝国全土に拡大を求めたこと (HA, *Philosophus Marcus Antoninus*, 11, 3)。  
 (49) *Forsch. Ephes*, II, no. 26.  
 (50) Bowie, op. cit., 47.  
 (51) Phaum, *CP*, 1005.  
 (52) *Philostratus, VS*, 587.

(本稿は、平成十九年度文部科学省科学研究費補助金若手研究 (B) による研究成果の一部である。)